

## 古英詩『出エジプト記』

藤原保明訳

### まえがき

一般に『出エジプト記』(*Exodus*)と呼ばれている古英詩は、イスラエル人がエジプト人の迫害から逃れ、紅海を渡るという旧約聖書の話をもとに作られた物語詩である。この詩は「ユーニウス写本」(*The Junius MS*)の『創世記』(*Genesis*)の次に収録されているが、長さは写本の校訂者によって若干異なることがあり、今回の翻訳に用いたLucas(1977)と、Turville-Petre(1981)、Irving(1970)、Krapp(1931)などの版では590行からなるが、Blackburn(1907)版では591行、その他にSedgefield(1928)のように589行という版もある。通称から明らかなおろ、この詩は旧約聖書の「出エジプト記」から題材を得ているが、その主な典拠となっているのは13章と14章のみであり、しかも、聖書に基づく他の古英詩と同様、詩人は聖書の原典から逸脱し、かなり自由に作品を仕上げている。

この詩の構成は、まず、モーセの戒律について述べた導入部分(1-7行)から始まり、モーセの経歴の概略(8-29行)、イスラエル人を脱出させるに至ったエジプトでの出来事のあらまし(30-53行)、イスラエル人たちの紅海への行軍(54-134行)、エジプト人たちの追撃とイスラエル人たちの迎撃の準備(135-251行)と続き、さらに、紅海についての描写とエジプト軍の滅亡(252-515行)について語られた後、結び(516-590行)で終わる。ただし、イスラエル人の行軍の順序について触れた部分(310-353a)の後—イスラエル人たちの父祖であるアブラハムに言及した部分(353b-361行)によってかろうじてつながっているが—突然、本題から外れたノアの洪水の話とイサクの生け贖の物語(362-446行)が挿入されていて、詩の構成上問題を残している。その他、誤記や脱落などの不備も少なくなく、この作品をきわめて難解なものとしている。このように構成や表現が整っていない原因として、写字生が聞き

書きによってこの詩を作成した可能性を指摘する学者もいる (Kennedy 1943 : 175)。さらに、写本のリーフが消失したことにより、141行と142行の間、および、戦闘の場면을扱ったと思われる446行と447行の間の2箇所はかなり大きな間隙ができてしまっている。

現存する部分から判断する限り、この詩のテーマは全体としてはエジプト脱出そのものより、紅海の描写とモーセの英雄的な指導力である。後者について具体的に言うと、たとえばイスラエルの兵士たちはエジプト軍の追撃の知らせを聞いて絶望的となるが、モーセに激励されると、彼らは勇気を得て氣勢を上げる (259-298行)。モーセはゲルマンの伝説上の王をイメージして描かれていて、イスラエルの兵士たちも同様にゲルマンの兵士を彷彿とさせる。その他、語句や表現などの多くも含め、詩全体は古英語で書かれた他の宗教詩や英雄詩の伝統に則っている。

この詩は本来700年代にノーサンブリアの修道士によって書かれたものと思われるが、アングリア方言の諸特徴も認められる。

### 『出エジプト記』

さて、我々はこの世の至る所でモーセの掟<sup>1)</sup>、すなわち、幾世代にもわたる人々のための驚くべき律法<sup>2)</sup>について、恐ろしい死出の旅の後に幸福なすべての人々に天国で与えられる生という報いについて、すべての生き物への永遠の恩恵について語られるのを聞いた。聞く耳を持った人は聞きなさい。(1-7)

万軍の主であられる真の王はみずからの力によって荒野でモーセに栄誉を与えられ、永遠で全能の支配者は多くの奇跡を行う力を彼に授けられた。彼は機敏で賢明な国民の指導者、軍隊の統率者、勇敢な隊長であり、神に愛されていた。勝利の支配者はこの勇敢な指導者には彼の一族の命を、アブラハムの息子たちには故国での住まいをそれぞれ任せられたが、その時、彼は神の敵であるファラオ<sup>3)</sup>の一族を杖で罰した。その報いは大きかった。慈悲深い主は敵の脅威に対抗するために彼ら<sup>3)</sup>に強力な武器をお与えになられた。彼<sup>4)</sup>は戦で大勢の敵の血族から統治権を奪うこととなった。万軍の神が彼に言葉で語りかけられたのはそれが最初であった。その折、主は多くの真の奇跡を語られた一賢明な神はこの世界と地の軌道と空を創造なされ、勝利の王国を定められた様子を語り、人間の子供たち、すなわち、多くのことを知っている賢明な父祖の一族がこれまで知らなかったみずからの名<sup>5)</sup>をお告げになられた。(8-29)

このようにして、エジプトから脱出する時、神は真の力によって軍の統率者であるファラオの敵に力を授けられ、栄誉を与えられた。そのために、国々の中で最大の国は死という古くから知られた苦惱、すなわち、気高い兵士たちの死に間もなく飲み込まれてしまった。人々は新たな悲しみに襲われ、富を奪われ、館での喜びは去った。主はいずれ迫害者となるであろう多くの初子たちを真夜中に厳しく打ちのめされ、町の守護神を破壊なされた。殺戮者、すなわち、(エジプト)国民にとって憎むべき迫害者は至る所に出没し、国は遺体で満ちた一初子たちは(死へと)旅立った<sup>6)</sup>。あちこちで嘆き悲しむ声上がり、この世の喜びはほとんどなくなり、吟遊詩人たちの手は自由を奪われ、民は、旅立つ群集は苦痛の旅に出ることとなった一敵(ファラオ)は(初子たちを奪われ)、地獄の神殿は(偶像を)奪われ、嘆き悲しむ声は国中でわきおこり、偶像は倒された。多くの人々が(死へと)旅立ったその日のことはこの世のあちこちに知れ渡った。このように、呪われたエジプトの人々は長い間(地獄での)捕らわれの身に耐えることとなった。それは、神の許しがあったにもかかわらず、モーセの一族が長い間熱心に待ち望んでいた旅を彼らがどこまでも妨害しようと考えたからである。(30-53)

軍は隊伍を整えた。一族の指揮に当たったのは勇敢で気高い隊長であった。彼は人々を率いて多くの砦、敵意に満ちた人々の土地と領土、狭い道、不案内な路を通り抜け、やがて戦を好む辺境の住人たちの所まで武具を運んで行った。彼らの国は雲の柱に包まれ、荒れ野は国境の端を占めていた。モーセは軍隊を率い多くの辺境の地を越えて行った。(54-62)

さて、彼らが敵から逃れてから二日目の夜、辺境の地にある町エタムの近くで、彼は全軍で氣勢を上げ、最強の兵力を維持した状態で宿営するよう栄光の戦士たちに命じた<sup>7)</sup>。彼らは困難な状況のために北寄りの道へと追いやられていた。南方には太陽の民の国と焼けつくような丘陵があり、熱く焦げるような太陽によって黒くなった人々がいることを彼らは知っていた。聖なる神はその国で恐ろしい熱から(イスラエルの)人々を守り、燃えるような天を、灼熱の空を聖なる雲の網で覆った。雲は遠くまで包み、地と天を等しく分け、人々を導いた。熱を発して明るく輝く炎は消えた。兵士たち、すなわち、群集の中で最も喜びに満ちた者たちは驚いて空を見上げた。太陽の覆いは空を進んだ。賢明な神が太陽の通り道を雲の柱で覆われたため、人々には帆索の場所が分からず、帆桁も見えなかった一神が忠実な者たちを栄光で称えられた時、地上に住む者たちは最も大きな幕屋がどのようにして張られたのか分からなかった。そ

して、三日目の野営は人々の喜びの一つとして行われた。大勢の人々は聖なる帆が、輝く空の奇跡がその場でそびえている様子を眺めた。人々は、すなわち、イスラエルの兵士たちは万民の神であられる主が幕屋の位置を示すためにその場に來られたのを目撃した。火と雲という二つの柱状のものは、輝く空にあり、彼らの前を進み、そして、いずれも聖霊の立派な活動によって夜も昼も人々と旅を共にした。(63-97)

私が聞いたところによると、それから翌朝になると、勇敢な人々はラッパを大きな音で吹き鳴らし、栄光の関の声を上げたそうである。名高い指導者モーセが命じると、軍隊は、勇敢な軍勢は、神の民は、戦の準備を整えた兵隊は、全員立ち上がった。彼らは生命の導き手<sup>9)</sup>が安全な場所へと通じる道を進んで行くのを見た。帆が彼らの旅を導いたので、船乗りたちはその後から海の道を進んだ。人々は喜び、軍勢から大きなよめきが上がった。空の印は夜ごと立ち上った一太陽が沈むと、もう一つの素晴らしい奇跡である燃える柱は人々の上を炎で照らし、彼らの行く手を守った。輝く光線が兵士たちの上で明るく輝き、盾は光を放った。影は消え去り、低く垂れ込める夜の影もその隠れ場を覆いきれなかった。空のろうそく<sup>10)</sup>は燃えた。この新たな夜の守護者は、砂漠の恐怖が、すなわち、灰色の荒れ野の脅威が海の嵐と共に不意に彼らを襲って命を奪うことがないように、軍隊の上に留まることになっていた。炎の東、明るい光輝が先を行く柱から垂れ下がり、それはまるで勇敢な者たちがモーセに従わなければ火の恐怖と熱い炎によって砂漠の中で軍隊を焼き尽くすと軍隊を脅しているかのようであった。柱は光に包まれて輝いた一盾は光を放った。(98-125)

兵士たちは真っすぐな道と軍隊の上にそびえる旗を眺めながら行軍した。やがて、地の果ての水の砦が進軍に余念のない軍隊の前に立ちはだかった。疲れ切った者たちは幕を張り、体を休め、従者は勇者たちに食事を運び、彼らの体力を回復させた。ラッパが鳴ると船乗りたちは丘の上に幕を広げた。このようにして、兵士たちの休憩所となる四日目の野営が紅海のそばに設けられた。(126-134)

その時、土地の者たちが追撃して来るという知らせが突然彼らの軍に届けられた。恐怖が、すなわち、死の脅威が隊の中で起こった。逃亡者たちは憎むべき追っ手を待った。危害を加えることに執着する者たちはかつて故国を追われた彼らに弾圧と迫害を与えたことがあった。追っ手は老齢の王<sup>10)</sup>が以前結んだ契約を無視したのである。(135-141)

老王は人々の宝物を手に入れ、国民の財産の守護者となり、それによって彼はとても栄えた。しかし、エジプトの人々は（イスラエル人たちが）反抗したことに腹を立て、これらを一切忘れてしまった。彼らは戦を起こして彼（ヨセフ）の血族の者たちを殺害し、契約を破棄した。好戦的な気持ちが、激情が胸の中に沸き、彼らは偽りの契約をして、命を救ってもらった<sup>111</sup>代償に裏切りで報いようとした。それゆえ、強力な神が彼らの殺戮の旅を成功なされたら、モーセの民はあの日の行為<sup>112</sup>に対して血で報いたことであろう。ファラオの軍が南の国々から兵を進め、槍を選び、騎兵隊（の武具）がきらめくのを見た時、（イスラエルの）兵士たちの心は彼らに対して絶望的となった—槍は整えられ、合戦は近づき、盾は輝き、ラッパは鳴った。軍旗が掲げられ、敵は国境を越えた。すると、角状のくちばしを持った（渡り鴉）は空中で叫び声を上げた。死体をついばむこの黒い猛禽は戦を渴望し、羽を露に濡らしたまま倒れた兵士の上で叫んだ。狼は食べ物を期待して恐ろしい夕べの歌を唄った。向こう見ずで残忍なこの獣は兵士が倒れるのを敵の背後で待った。この辺境の守り手は真夜中に吠えた。死ぬべき運命にある魂は飛び去り、（イスラエルの）人々は包圍された。（142-169）

馬の背にまたがった傲慢な家臣たちは時々隊列から抜け出して道を駆けた。人々の支配者である王は軍旗を掲げ、先頭に立って軍隊と共に駆けた。人々の指揮官である王は戦闘に備えて兜を固く結び、顎当てを引き締めた。軍旗はきらめき、鎖帷子は音を立てた。王は強固な隊列をしっかりと保つよう自分の軍隊に命じた。一方、味方の者たちは<sup>113</sup>土地の住民の襲来を憎々しげな目で眺めた。恐れを知らぬ（エジプトの）兵士たち、激しい戦を渴望する者たち、主君に忠実な百戦練磨の武士たちは王の近くに集まり、戦を待ち望んだ。王は古いしきたりに従い、名高い国民の部隊の中から血筋の優れた二千名を選んでいった。彼らは王たちであり、血族の者であった。彼らはいずれもその時点で駆り出せる限りの男の闘士を連れてきていた。土地の兵士たちは全員集い、王たちは隊の中にいた。耳慣れた角笛は若い兵士たちが、人々の部隊が武器をどこへ運ぶべきかをしばしば隊の中で告げた。このようにして、黒い軍隊、増援兵、人民軍、大量の敵は敵を目指して数千人ずつ進んだ。彼らは敵方へと駆り立てられた。彼らは兄弟たちの仕返しとして<sup>114</sup>強力な軍隊と剣によって明け方にイスラエルの民を滅ぼす決意をしていた。それゆえ、野営地では嘆き悲しむ声、恐ろしい夕べの歌が沸き上がり、恐怖がたちこめ、武具が邪魔になった。騒動が沸き起こると大胆な話は影をひそめた。敵は決然としていて、軍隊は武具で輝いて

いた。もっとも、多くの民を見守っていた力強い天使が不敵な者たちを打ち砕くことになったため、敵はもはや（生きて）互いを見ることはできなくなったが一敵の進軍は阻止されたのである。(170-207)

避難民たちには一晩の猶予があったが、軍隊と海という敵が彼らの四方で待ち構えていて、もはや逃げ道はなかった。彼らは自分たちの正当な故国（に帰ること）に絶望的となり、悲惨な結末を予感しながら、黒い衣をまとって山の上に腰を下ろした。これらの一族の者たちは自分たちより多い軍勢（の襲来）を見守っていた。やがて、モーセは兵士たちに命じて青銅のラッパで夜明けに人々を起こし、兵士たちを目覚めさせ、武具を身に着け、兵隊たちに合図して浜辺の近くに来させた。見張り役たちは急いでラッパの合図に耳を傾けた。隊は準備に取りかかった。船乗りたちは山の上で幕を片付け、ラッパの音に聞き耳を立てた。部隊は急いだ。それから、彼らは悪意に満ちた敵に対抗する兵士の中に勇氣あふれる一二の部族がいることを確認した。部隊は奮起した。盾を持つ高貴な血族の兵士から成るそれぞれの部族から五〇の中隊が編成され、名だたる軍隊のそれぞれには千名の槍兵、栄光の闘士がいた。それは実に勇敢な部隊であった。軍の指導者たちは隊の中に臆病者を受け入れなかった。臆病者とは、若さゆえに盾の下で自分の手で恐ろしい敵から武具を守ることができず、盾の縁を突き抜けた致命傷、怪我の痕、槍の襲撃を経験していない者のことであつた。年老いた白髪兵士たちも力が減退すれば勇ましい軍隊の中にも戦で手柄を立てることはできなかった。そこで、彼らは体格によって兵士を選んだ。すなわち、人々の中で立派に武勇を発揮できるかどうか、さらに、力が槍の握りに（かなうほど）強いかどうかで戦闘能力が試された。そして、武力で名を馳せた軍勢は集結し、進軍を待ち望んだ。軍旗は<sup>15)</sup>、最高に輝かしい柱は<sup>16)</sup>空中へと立ち昇った。彼らは全員、盾の上で輝くこの案内役<sup>15)</sup>が潮の流れの近くで空を突き破る時を待った。(208-251)

すると、伝令が、大胆な使者が兵士たちの前に飛び出し、盾を高々と掲げ、勇士モーセの話の間、多くの軍勢が静粛にするよう族長たちに促した。軍の指揮官でもある王國の守り手は聖い声で軍勢に語ることを望み、堂々と話した。「ファラオが戦士の大軍を、無数の兵士を率いて来たとしても恐れることはない。力強い神は今日私の手とおしてこれまでの行為に対する報いを彼ら全員に与えてくださる。そのために、彼らは生きている間、もはやこれ以上イスラエル人の血族を悲惨な目に合わせて迫害することはない。死んだも同然の軍隊と死ぬべき運命にある肉体を恐れることはない。敵のはかない命の期間は

終わりを迎えた。しかし、神の教えはおまえたちの胸から忘れ去られている。より良い助言を与えよう。どこへ行軍しようとも、栄光の主を称え、命の主に慈悲と戦勝を祈願せよ。わが軍を大きな手で守ってくださるのはアブラハムの永遠の神であり、勇敢で力強い被造物の主なのだ。」(252-275)

命ある者たちの指導者は軍勢の前でさらに大声を上げ、人々に向かって言った。「最も愛すべき者たちよ、自分の目で一つの奇跡を見よ。私のこの右手が緑の印<sup>16)</sup>で深い海を打って生じた奇跡を見よ。波は高くなり、あつという間に水を土塁に変えてしまう。道は乾き、通り道は灰色となる。海は開かれる—この世の人々が横断するのをこれまで聞いたことがない太古の礎、これから永久に波に覆われることになる光り輝く空間、閉ざされていた海の底は開かれる。南風は強い海風を押しつけ、潮は分かれ、海は砂を吐き出す。力強い神は武器で輝くおまえたちに恩寵を示されたことを私はよく知っている。主が赤い海の水を防御壁として立てられたからには、敵の捕獲から逃れるために急ぐのが最善だ。防護堤は、すなわち、素晴らしい海の通路は空の屋根に届くほど見事に築かれている。」(276-298)

この言葉が終わると、大勢の者、勇敢な軍隊は全員立ち上がった。海は静まり返っていた。軍隊は白い盾と軍旗を海岸に立てた。海水の壁は上昇し、この潮の守り手はイスラエル人たちのそばで一日中真っすぐに立っていた。兵士の一人は心をつつにして(神の)庇護の契約を固く胸に秘めた。敬愛する人の話と声と音調が紅海を渡る前に終わった時、彼らはその聖なる人物の教えを決して軽視しなかった。(299-309)

そして、四番目の部族が最初に進んだ<sup>17)</sup>。隊列を組んだ勇敢な兵士たちは海の中へと進軍した。ユダの血族の者たちの部隊は目の前に広がる未知の道に沿って緑の海底の上を急いだ。このように、彼が戦勝の栄光を手にした時、力強い神はその日の仕事に対して大きな報いを与えられたので、彼は王国の支配権と血族の者たちの栄光も手に入れることとなった。(310-318)

最も偉大な民である彼らが海の中を通り抜ける時、彼らは自分たちの軍旗として盾の上に印を、すなわち、獣の中で最も勇敢な黄金の獅子の像を兵士たちの中に掲げた。軍の指導者が生きている限り、彼らはいかなる国民からの屈辱にもうこれ以上耐えようとは思はなかった。ユダが行く前線では突撃があり、激しい戦があった—そこには勇敢な若い兵士たち、恐れを知らぬ兵士たちがいて、武器の激しい打ち合い、血だらけの傷、軍隊の猛襲、兜の衝突があった。(319-330)

船乗りであるルベンの息子はこの部隊の後ろから堂々と進んだ。船乗りたちは、大勢の人々は盾を携えて塩辛い沼地の上を行き、名高い大部隊は大胆に進んだ。彼は罪を犯したことにより<sup>18)</sup> 統治権を失ったため、このように親しい者<sup>19)</sup>の後ろを遅れて行進した—彼の弟は国で第一子の権利、富と地位を彼から奪い去った。それでも彼は臆病ではなかった。(331-339)

シメオンの息子たちは人々の部隊を率い、大勢と一緒に彼の後について先へと進んだ。この三番目の一行は水に濡れながら槍を持って勇敢に突進した—軍旗は部隊の上でひらめいた。神の印の一つである夜明けが、海からの輝く朝が海の上に現れた。軍隊は行進した。(340-346)

このように、一つの部族が武器に身を固めた軍隊となって他の部族の後を進んだ。最も力の勝った一人が—彼は力によって名声を得たのであるが—人々を進軍の道へと導いた。人々は雲の柱の後を追いつつながら部族ごとに次々と行進した。各部族はモーセが告げた部族間の序列と人々の血統を知っていた。彼らには一人の父祖<sup>20)</sup>がいた。この指導者は敬愛され、人生経験が豊かで、高貴な血族の者たちに慕われ、土地の権利を得ていた。家系と人間の起源と各人の家柄を最もよく知っている老人が巧みに語るところによると、族長の一人が勇敢な人々の子孫であり、信心深い人々である神にふさわしいイスラエル人の部族の生みの親となった<sup>21)</sup>。栄光の指導者ノアは三人の息子と共に新たな水の流れの上を、この世で生じた最も深い洪水の上を進んだ。私が聞いたところでは、彼は心の中に神聖な契約を抱いていたので、潮の流れを越えて最大の宝物船を選べたそうである。この聡明な船乗りは、永久に生き残るものたち、各種族の初代、子孫を残せる人が知っているありとあらゆるものたちの父と母を地上のすべての生き物の避難場所へと数えて入れた。さらに、人々が空の下で楽しむことのできるさまざまな種子を船底に運び入れた。ところで、系図によるとノアから数えて九代目にアブラハムの父<sup>22)</sup>がいたと賢明な人々は言葉で述べている。天使たちの神はアブラハムに新しい名前<sup>23)</sup>をつけられた。さらに、どこにいても聖なる集団を守り、人々を支配するよう神は彼に命じた。彼は流浪の中で暮らしたが、その後、彼は聖なる神の命令に従い、最も大切な者<sup>24)</sup>を連れ出した。血族の者たちは<sup>25)</sup>シオン山を目指して山腹を登った。聞くところによると、彼らはそこで約束に、神聖な契約に出合った—彼らは栄光を見た。ダビデの賢い息子である栄光の王は賢明な助言に従い、その後その場に神のための神殿を建てた。この世の王の中で最も賢明な者は神聖な教会堂を、すなわち、最も高く、最も神聖で、人間に最もよく知られた、最強で最も名高いものを建て



た。人間の子供たちは、地上にいる人々は自分たちの手でそれを建てたのである。アブラハムは息子イサクを所定の場所へと連れて行き、火葬用の薪に火をつけた一魂の最初の殺害者<sup>26)</sup>にさえこれ以上の悲しい定めはなかった。彼は自分の跡取りを火の中に投げ込もうとした—最も優れた人を、自分の最愛の息子を生け贄として燃え盛る炎の中へ—この世で唯一の後継者を、自分がとても長い間待ち望んでいた人生の慰めを、長く待ち望んでいた希望の星を人々への遺産として投げ込もうとした。高名な彼がその子供を手でしっかりと掴み、先祖伝来の剣を引き抜いた時一切っ先はきしんだ—息子の命は天の王に従うことより大切だとは思わないと彼はきっぱりと言った。身分の高いアブラハムは立ち上がり、神のお許しが得られれば、まだ幼い息子を赤い刀の先で、自分の子供を剣で殺そうとした。気高い父は息子を神聖な生け贄として殺したくはなかったが、やむなく手で捕まえた。すると、天から声が、すなわち、栄光の御方の声が届き、彼を制止し、言葉を發した。「アブラハムよ、自分の子供を、息子を剣で殺してはならん！万物の王がおまえを試したところ、おまえは主に対する契約を、固い約束を守ってきたことが明らかとなった。この契約はおまえが生きている限り、最も長い間おまえにとって好意となり、永久に信頼のできるものとなるであろう。これ以上の契約が人間の子供たちに必要であろうか？天も地も主の栄光の言葉を封じ込めることはできないであろう。この言葉は、この世の広がり、大地が囲む地域と天、海と悲しみに満ちたこの空が包み込むものより広くて大きい。天使たちの指導者であられる主、運命の支配者、勝利の信頼の厚い万軍の神は、みずからの命にかけておまえに誓いを立てられた。すなわち、地上の石、天の星、崖の砂、塩辛い波を一人ですべて数えられるほど賢くなければ、地上の人間はどのような技を用いてもおまえの部族と血族と盾を持つ兵士の数を数え、それを真実の言葉で告げることはできないと。しかし、おまえの民、父の高貴な子供たち、人々の中で最も優れた者たちはエジプト人たちの国に至るカナン人たちの国を海と海の間で手に入れるであろう<sup>27)</sup>。」(347-446)

人々は恐怖に襲われた。波の恐怖は悲しみにあふれた魂を襲い、海は死の恐怖で脅した。険しい崖は血に染まった。海は血糊を吐き出し、ざわめきが波の上に起こり、海は武器であふれ、恐ろしい霧が立ち込めた。エジプト人たちは引き返した。臆病になった彼らは突然の恐怖に襲われて怯え、家に逃げ帰りたいと思った。彼らの強気の発言は全く影をひそめた。恐ろしくうねる波は彼らの上に黒々とのしかかり、軍勢の中のだれ一人としてその場から家に帰り着く

ことはなく、運命は彼らの背後を波で閉ざした。それまで道があった所では、海が荒れ狂い、軍勢は溺れて死んだ。潮の流れは高まり、騒ぎは、すなわち、最も大きな軍勢の叫び声は空高く上がった。敵は瀕死の声で叫んだ。上空は暗くなった。血は潮の流れに混ざった。土塁は崩れ、最強の死の海は空を打った。勇敢な者たち、軍勢の中にいた王たちは滅んだ。叫び声は波の果てで弱まり、盾は輝いた。海水の壁、逆巻く海の水は兵士たちの上で高々とそびえた。進む力をなくし、鎖帷子に縛られた軍隊はしっかりと死に捕らえられた。潮の流れ、絶えず続く冷たい海、進路を外れることに慣れたもの、苦渋に満ちた裸の使者、敵を圧倒した悪意に満ちた勇ましい魂が塩辛い波を連れて永久の海底へと戻るまで、浜辺は定められた運命を待った。真の神がモーセの手によってその意志を示され、遠くへと駆り立て、恐ろしい把握で捕らえ、そして、洪水が荒れ狂い、死すべき者たちが倒れ、海の水が陸を襲うまで、青い空には血が混ざり、波の碎ける海は血の恐怖で船乗りたちの航海を脅し、空は荒れた。天の王国の全能の守護者である主が聖なる手で防御の柱と大胆不敵な人々を打ち倒された時、空は荒れ、城壁は崩れ、波は碎け、海水の高い壁は壊れた。彼らは防御壁の道、潮の流れの意志を阻むことはできず、主は悲鳴を伴う恐怖によって多くの者を滅ぼされた。海は荒れ狂い、逆巻き、碎け落ちた。恐怖がみなぎり、恐ろしい海の東縛は騒がしい音を立て、天からの神の高貴な被造物、泡の胸を持ったものは天から戦の道に落ちた。洪水の守り手が防御にならない波を古来の剣で打つと、罪深い者たちの軍の一隊はこの致命的な打撃によって滅びた。溺死の恐怖で青ざめた軍隊は波にすっかり取り囲まれ、神の意志が表れた最も高い波に届いた時、魂を失った。辛い思いをした者たちは、エジプトの兵士もファラオも、部下と共に全員滅んだ。神の敵が海底に沈んだ時、波立つ海の守護者である怒り狂う守り手は自分より強く、致命的な把握で戦を決着させたいと望んでおられることにすぐ気づいた。エジプト人たちにはその日の行為に対して大きな報いが訪れた—多くの軍勢のだれ一人として生きて国に戻った者はおらず、そのためにどの兵士も妻に自分たちの不幸を報告できず、貴人たちの死という最悪の知らせを町から町へと告げられず、強力な軍も使者も溺死し、海に飲み込まれた。力を持っておられる御方はこのように人々の鼻柱を折られた。それは彼らが神に刃向かったからである。(447-515)

その後、高貴な男モーセはイスラエル人たちに永遠の勧告を、深遠な神託を海岸で聖なる言葉で語った。人々が聖書の中で今でも見つけるように、神がその旅において真の言葉で彼らに命じられた掟のすべてはその日の出来事にはっ

きりと表れた。純粹な心を持った生命の解釈者<sup>29</sup>である肉体の守護者が聖霊の鍵で大きな恩寵を開けるなら、神秘は解かれ、知恵が現れるであろう。彼は賢い言葉を胸に秘め、我々が神との交わりや主の恩寵をなくさないように我々の心に熱心に訴えかける。学者が<sup>29</sup>我々により良いこと、天国でのより永続的な喜びを告げてくれるので、彼はさらに多くのことを我々に与えてくれる。この世というのは東の間の幸福であり、罪で汚れ、追放者たちに与えられるもの、哀れな人々が期待するものなのである。国を失った者たちは悲しみに沈んでこの来客用の広間<sup>30</sup>に住み、心の底から嘆き、地の下にある悪徳の場<sup>31</sup>の存在にはっきりと気づく。そこでは現在老齢と若死にという大泥棒が支配していて、火が燃え、蛇がのた打ち回り、あらゆる悪事のための穴が永久に開けられている。最後の審判、最も大きな力、悪業に対する怒りの日がこの世を訪れる時、主はみずから裁きの場で多くの者たちに審判を下される。その時、主は信頼できる者たちの魂を、祝福された霊を天上へと導かれる。そこでは光と命と豊かな恩寵がある。兵士たちは幸福に浸りながら主を、万軍の栄光の神をいつまでも称える。分別を気づかう最も心優しい人物は力によっていっそう強められ、大きな声で次のように語った一軍隊は神の託宣を受けたこの人物の意志を、高貴な人の慎重な言葉を静かに待った。彼らは奇跡を感じた—彼は多くの人々に語った。「この軍隊は偉大である。この旅を導びかれる指揮者は強く、我々の最大の救済者であられる。主は我々にカナン人、町と宝物、広大な国を授けてくださった。おまえたちが聖なる教えを守るなら、天使たちの主ははるか昔に祖先たちに誓言によって約束なされたことを今実行に移されるであろう。そうならばおまえたちはこれから敵を全員制圧し、二つの海の間で勝利の王国を、兵士たちの酒宴の広間を確保できるであろう。おまえたちの栄光は大きい。」

(516-564)

これらの言葉を聞くと軍勢は喜び、戦勝のラッパは素晴らしい音を立てて響いた—軍旗はひるがえった。人々は陸の上にあった。栄光の柱は軍隊を、神聖な群集を神の庇護の元へと導いた。兵士たちは果敢にも海水の屋根の下へと挑んだが、敵の支配から命を救い出すことができ、彼らは生きていることを喜んだ。彼らはその場で壁がそそり立つのを見た。彼らの武具を運んだ海は彼らには血まみれに見えた。敵軍から逃れた後、彼らは戦の歌を楽しんだ。軍勢は大きな声を張り上げた—彼らはその日の行為に対して神を褒め称えた—人々は栄光の歌を唄った。大群集は女も交えて畏敬におののいた声で多くの奇跡について勇ましく歌を唄った。その時、海辺では黄金で飾られたエチオピアの女性<sup>32</sup>が人

目を引いた。人々は（戦利品）の首飾りを手で取り上げた。彼らは喜びにあふれて授かり物を眺め、戦利品を手にした—彼らは捕らわれの身から開放された。海の生存者たちは海岸で古の宝物、衣服と盾を部族の間で分配した。彼らは黄金と綺麗な紫の布、ヨセフの宝物、人々の見事な所持品を適切に分配した。（これらの宝物の）守り手たち<sup>39</sup>、最大の国民は死の床に横たわっていた。（565－590）

### 訳注

- 1) モーセの掟、律法とは、いわゆる「モーセ五書」（旧約聖書最初の五書、すなわち、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の総称）のこと。モーセは五書の中心人物となっている。
- 2) ファラオは古代エジプトの王。
- 3) 「彼ら」はアブラハムの息子たちを指す。
- 4) 「彼」はモーセのこと。
- 5) ヤハウェ (Yahweh) のこと。
- 6) 旧約聖書「出エジプト記」（第13章15節）参照。
- 7) 第1日目はスコトに宿営した。旧約聖書「出エジプト記」（第13章20節）参照。
- 8) 「生命の導き手」は雲の柱を指す。
- 9) 古英語の「空のろうそく」(heofon-candel) は一般には「太陽」をさすが、ここでは「火の柱」のこと。
- 10) ファラオのこと。
- 11) ヨセフがエジプトでの7年間の飢饉を救ったこと。「創世記」（第41章）参照。
- 12) 上記の飢饉からの救済を指す。
- 13) イスラエル人たちを指す。
- 14) 初子を殺されたことへの報復を指している。
- 15) 「軍旗」、「輝かしい柱」、「案内役」はいずれも雲の柱を指す。
- 16) 「緑の印」とはモーセの杖のこと。
- 17) ヤコブには4人の息子がいたが、兄のルベン、シメオン、レビがヤコブに退けられたため、第4子のユダの血族が最も勢力が強かった。「創世記」（第49章3－8節）を参照。
- 18) 「創世記」（第35章21節）には「ルベンは父の側女ビルハのところへ入って寝た。」とある。
- 19) 「親しい者」とはユダのことであろうが、モーセを指す可能性もある。
- 20) アブラハムのこと。
- 21) 次の362行から446行まで、ノアの洪水とイサクの生け贖の話が挿入されている。

- 22) テラのこと。「創世記」(第11章27節) 参照。
- 23) アブラムは99歳の時、主の命によりアブラハムと改名した(「創世記」(第17章1-5節))。
- 24) 息子のイサクを指す。
- 25) アブラハムとイサクのこと。
- 26) 「魂の最初の殺害者」の解釈は難しいが、アブラハムではなくアダムであろうとする説が有力である (Lucas 1977:126)。
- 27) 446行以下、66行分が欠落している。
- 28) 知性 (intellect) のこと。
- 29) キリスト教会の教父 (Church Father) のこと。
- 30) 「この世」を指す。
- 31) 地獄のこと。
- 32) モーセのエチオピア人の妻ツイボラ (Zipporah) のことであろう (「出エジプト記」(第2章21節))。
- 33) エジプト人たちを指す。

### 参考文献

- Blackburn, Francis A. (ed.) 1907. *Exodus and Daniel: Two Old English Poems*. Boston & London: D. C. Heath.
- Gordon, R. K. (transl.) 1954. *Anglo-Saxon Poetry*. (Everyman's Library 794) London & New York: Dent & Dutton.
- Hazome, Takeichi (羽染竹一). (編訳) 1992. 「続・古英詩大観」東京: 原書房。
- Irving, Edward Burroughs, Jr. (ed.) 1970. *The Old English Exodus*. Hamden: Archon Books.
- Kennedy, Charles W. 1916. (transl.) *The Cæmden Poems*. London: Routledge.
- \_\_\_\_\_. 1943. *The Earliest English Poetry*. New York: Oxford University Press.
- Krapp, George Philip. (ed.) 1931. *The Junius Manuscript*. (The Anglo-Saxon Poetic Records. Vol.I) New York: Columbia University Press.
- Lucas, Peter J. (ed.) 1977. *Exodus*. (Methuen's Old English Library) London: Methuen.
- Sedgfield, W. J. (ed.) 1928. *An Anglo-Saxon Book of Verse and Prose*. Manchester: The University Press.
- Turville-Petre, Joan. (ed.) 1981. *The Old English Exodus*. Oxford: The Clarendon Press.